知と心と地域を結ぶ ● Iwate Prefectural University　岩手県立大学広報紙

IPU 29

学生から人財へ。

実社会への扉を開く。いよいよ、就職活動が本格化。

かなえたい夢。就きたい仕事。さまざまな思いを胸に、新4年生にとっては就職活動で忙しい春が来ました。

地域や業種でバラつきが見られるものの、おおむね景況に好転の兆しが見られます。新規プロジェクト、業容拡大に向けた動きの活発化。ひと頃のリストラ基調を経て、採用マインドが復活してきたこと。そして、専門性を身に着けた4年制大卒者への期待。こうした要因が働いて、県立大生の就職事情は明るさを増しているようです。

「医療系のシステムエンジニアが希望で、県外の10社ぐらいにエントリーするつもりです。3月半ばから、企業訪問や会社説明会のスケジュールが立て込んでいます。不安を打ち消す方法など、あれこれと先輩がアドバイスしてくれました。採用担当者にアピールするチャンスは絶対に活かします」

と、ソフトウェア情報学部の柳町浩さん。もう、スーツの着こなしに慣れました。しばしキャンパスを離れ、内定めざして実社会の空気に触れています。

アイーナキャンパス、オープン

盛岡駅西口で、お会いしましょう。

駅から歩いて数分。しかもマリオスの、すぐ近く。この4月1日、アクセスが便利で利便性に富む場所に、本学のサテライトキャンパスがオープンします。

「岩手県立大学アイーナキャンパス」は、あらたに誕生した「いわて県民情報交流センター」の7階です。県立図書館なども入居する複合施設を新拠点に、さらなる地域貢献と教育・研究機能の拡充が図られていきます。

本学の特徴を活かす事業の概要は、次の通りです。

※社会人等教育機能／大学院の授業を行うとともに、リカレント講座を通じた、社会人のキャリアアップをサポートします。

※生涯学習支援機能／バラエティーに富む公開講座や講演会を開催して、多様な知的ニーズに応えます。

※ソーシャルサービス機能／保健医療に関する相談を受け付けるほか、ソーシャルサービスセンターと臨床心理センターを開設してサービス機能を高めます。

※地域協働・産学連携活動支援機能／教育ならびに研究の成果、学術情報をはじめ入試情報、就職情報などをリリースします。

キャンパス彩

華やぐ笑顔。

外は、つめたい雨まじりの雪模様。
あいにくの天気も忘れさせるほど、
卒業生の笑顔が弾けました。
3月23日に行われた学位記授与式。
キャンパスから旅立ったのは
看護学部99人、社会福祉学部106人、
ソフトウェア情報学部148人、
そして総合政策学部101人の計454人。
華やぎの中、就職や進学など
それぞれの道に向かう
決意が伝わってくる瞬間でした。

キャンパス・ダイアリー

4月

入学式
- 四大・大学院…4月6日
- 盛岡短期大学部…4月6日
- 宮古短期大学部…4月4日

新入生オリエンテーション
- 4月7日

前期授業開始
- 4月12日

6月

開学記念日
- 6月19日

東北地区大学総合体育大会
- 6月16日～7月3日

7月

大学説明会
- 7月2日

あなたの声を

IPUニュースの紙面づくりに御参加ください。
記事に関する感想や意見、
さらに投稿、本学への質問など。
内容も形式も問いません。
FAXまたはEメールで随時、受け付けています。

リエゾン Liaison

先日、本学が公立大学法人になって初めての卒業式が行われました。卒業生の皆さんには、建学の理念の一つである「実学・実践」のもと多様な分野で活躍してくれることを期待します。さて、4月1日「いわて県民情報交流センター（通称アイーナ）」7階に県立大学アイーナキャンパスを開設します。当該キャンパスでは、都市機能に近接するメリットを活かしながら、地域貢献の強化と教育・研究機能の向上を図り、本学が地域の大学として成長していくことを目指しています。公開講座等も開講いたしますので、お気軽に足をお運びいただきたいと存じます。（佐藤）

岩手県立大学広報紙
IPU 29
発行／2006年3月31日

公立大学法人 岩手県立大学 Iwate Prefectural University　研究・地域連携室
〒020-0193　岩手県滝沢村滝沢字巣子152-52
TEL.019-694-2000 ・ FAX.019-694-2001
URL.http://www.iwate-pu.ac.jp/
info@ml.iwate-pu.ac.jp

前年比でプラス416件

増える求人。就職率も高水準をキープしそう

新卒採用が活発化してきた傾向は、そのまま就職活動への追い風となっています。

この2月末現在、平成18年3月卒業予定者（四大）への求人は、延べ1998件に達しています。前年同期より416件の増加です。求人数と伸びが顕著な業種ならびに分野は

- ●卸売・小売業（154→218）
- ●情報通信業（365→429）
- ●製造業（136→174）
- ●病院（472→556）
- ●社会福祉施設（109→161）

このほか電気・ガス・熱供給・水道業、運輸業、金融・保険、教育・学習支援などの業種でも数十件ほどの求人ですが、前年度比でプラスの数字が残されています。

当事者への確認ならびに各学部との連携を経て、平成17年度別の就職実績が確定されることになります。ちなみに前年度の就職率は、看護学部97・9％、社会福祉学部93・6％、ソフトウェア情報学部97・2％、総合政策学部95・3％。最終的には、これと同等レベルの成果が挙げられると期待されています。

■あちこちのブースで真剣な表情が見られます。県内外の企業から採用担当者を招き、業界動向や仕事について熱心な説明を聞くチャンス。さまざまな業種への理解を深められる合同企業研究セミナーを年末から2月にかけて延べ5回、学内で開催しました。

就職支援センターの厚いサポート

「一人ひとりが道を開いて適職に就けるよう、学年を問わず応援しています。キャリア形成の心構え、自己発見、適性チェックに関すること。さまざまな分野に及ぶ求人企業の開拓。このほか業界研究セミナー、就職ガイダンス、合同企業研究セミナーの開催。そしてタイムリーな情報を提供したり、就職活動の実践的な進め方をアドバイスしたり…。学生とのコミュニケーションを深め、頼れる存在でありたいと思います」（教育・学生支援室／就職支援グループ＝荒澤順子・主査）

短期大学部との連携も深める就職支援センターは、学生ホール棟と隣り合うメディアセンターのA棟3階にあります。水曜日、ジョブ・カフェのキャリアカウンセラーによる出張相談も受けられるようになり、サポート内容は広がっています。

■ボードに求人情報が張り出され、資料棚には企業・団体ごとのファイルがギッシリ並んでいます。このほか、就職や資格に関するパンフレットや雑誌も豊富に揃う就職支援センター。こうした資料を閲覧するほか、就職相談で積極的に利用する学生が大勢います。

オンリーワンの存在感

全学的な研究と地域貢献を語るフォーラム

ジャンルを超えて多彩な知的資産を融合。学部横断型研究を推し進め、その成果を社会に還元していく大学像が熱く語られました。

地域連携フォーラムの第一弾は、1月7日に盛岡市で開催。研究と地域連携に取り組むビジョンを船生豊＝研究・地域連携本部長が語った後、五つの全学プロジェクト「テラヘルツ応用研究プロジェクト／地域専門職高度化プロジェクト／共創メディア研究プロジェクト／少子・高齢研究プロジェクト／環境研究プロジェクト」の概要を各リーダーが紹介しました。

さらに、地域防災に関する研究事例を発表するコーナーも。専門性に裏打ちされた数々の知見が示されました。

2月21日に釜石市で、3月2日に北上市で、3月14日には宮古市で開催された地域連携フォーラム。「安心・安全・安楽な地域生活」「高齢者介護・福祉」「地域づくり」というカテゴリーの研究事例も参加者の関心を集めていました。

岩手の付加価値をMAXへ

次世代モデルの構築に向けて、ゲストスピーカーが示唆と提言

「岩手の価値を生む戦略的改革シンポジウム」を3月7日、各界からゲストスピーカーを迎えて開催しました。次世代の創造を指向し、さまざまな知と情報を用いて岩手の資源を活かす。そして地域特性にふさわしい付加価値を、最大限へ高めていく——。こうした主旨に基づいて達成すべき内容の方向性、さらに具体的な枠組みやノウハウを多面的に討議しました。

セッションは2部構成で、テーマは「地域再生のためのニーズとシステム」「ソフトウェアの新しい技術と手法」。ミュンスター大学（ドイツ）のコンピュータサイエンス学部／セルゲイ・ゴルラッチ教授らIT関係者などが提言に臨みました。

地域に広がる協力会

図書寄贈ほか学生への表彰も

宮古短期大学部は地域に支えられ、地域とともに歩んできました。平成2年4月に開学して以来、地域と本学をつなぐ大きな役割を担っていただいているのが、宮古短期大学部協力会です。

それは行政機関や民間団体など18団体で構成されており、会長は宮古市長で、事務局は宮古市教育委員会に置かれています。協力会からは図書の寄贈など、さまざまな支援をいただいています。また、特に優秀な卒業論文を発表した学生への表彰も行われており、在学生の学習意欲の向上が図られています。

輝きを讃えよう。

学生表彰制度による「学長賞」「学長特別賞」の受賞者が決まり、滝沢キャンパスでは3月22日、表彰式が行われました。

なお、平成17年度に表彰を受けた学生と論題は次の通りです。

- ●工藤　真由美「情報化社会におけるe-ビジネスの位置」
- ●佐々木　俊樹「企業城下町の衰退と地域産業の再生―岩手県釜石市を事例に―」
- ●倉俣　恵祐「システム環境に柔軟なC言語学習支援システムの開発」

■岩手県立大学学長賞…特に優れた学業成績または研究成果を収めた（卒業予定者）。

○看護学部／佐藤　久美子
○社会福祉学部／佐藤　藍
○ソフトウェア情報学部／若槻　俊宏
○総合政策学部／細矢　汐里
○看護学研究科博士前期課程／鈴木　美代子
○社会福祉学研究科博士前期課程／今　洋子
○ソフトウェア情報学研究科博士前期課程／石田　智行
○総合政策研究科博士前期課程／井上　武亮
○ソフトウェア情報学研究科博士後期課程／井上　春樹
○総合政策研究科博士後期課程／辻　盛生

■岩手県立大学盛岡短期大学部学長賞…特に優れた学業成績を収めた（卒業予定者）。

○生活科学科／菅生　暁子

■岩手県立大学宮古短期大学部学長賞…特に優れた学業成績を収めた（卒業予定者）。

○経営情報学科／佐々木　俊樹

■岩手県立大学学長特別賞

○看護学部／秋山　龍太
看護学部学生自治会を創設。学部内、学部間の学生交流の活性化に努めたほか、地域への情報発信など、学生活動の活性化に尽力した。
○看護学部／山本　智世
平成17年12月10日、第22回全国大学放送コンテスト本選朗読部門において準優勝した。
○総合政策学部／藤原　江里
各種テニス競技大会で連続して優秀な成績を収め、かつ地域スポーツクラブの指導・育成に尽力した。
○総合政策学部／菅原　智里
各種シンポジウム等において主催者の推薦を受けてパネラー等として参加し、また全国政策・情報学生交流会の企画スタッフとして継続して携わり、様々な社会活動への積極的な関与によって本学の評価を高めた。
○総合政策学部／自主ゼミグループ「G-ish」
様々な環境問題に関する社会的活動を積極的に企画し、啓発活動を行った。
○ソフトウェア情報学研究科博士前期課程／堀川彬夫
第21回NICOGRAPH論文コンテストにおいて、最優秀論文賞を受賞した。

■岩手県立大学盛岡短期大学部学長特別賞

○国際文化学科／苅間沢　祐子
イベントやワークショップの企画・運営等を通じ、発展途上国の子供をめぐる社会問題への啓発や支援活動により短大部の教育理念である「地域の国際化」に貢献した。

[教　職　員　人　事]

■教員の部

【退職者】平成18年3月31日付

●副学長／沼田　俊昭
●ソフトウェア情報学部　教授／曽我　正和
●総合政策学部　教授／古川　浩一
●総合政策学部　教授／漆崎　健治
●看護学部　助教授／細越　幸子
●ソフトウェア情報学部　教授／鈴木　克明
●総合政策学部　教授／天野　巡一
●社会福祉学部　助教授／鈴木　眞理子
●ソフトウェア情報学部　講師／米田　多江
●看護学部　助手／安藤　明子
●看護学部　助手／安保　寛明
●看護学部　助手／荒屋敷　亮子
●看護学部　助手／大谷　由香
●看護学部　助手／柴田　尚子
●看護学部　助手／畠山　怜子
●看護学部　助手／藤村　由希子
●看護学部　助手／渡部　朋
●社会福祉学部　助手／坂下　智恵

【採用者】平成18年4月1日付

●看護学部　助手／飯塚　文香
●看護学部　助手／安藤　里恵
●看護学部　助手／藤村　史穂子
●社会福祉学部　講師／中谷　敬朗
●社会福祉学部　実習講師／下平　なをみ
●社会福祉学部　実習講師／岩渕　由美
●総合政策学部　教授／澤本　潤
●ソフトウェア情報学部　教授／鞆谷　与止男
●共通教育センター　教授／松本　祐司
●研究・地域連携本部　助教授／坂本　誠一
●盛岡短期大学部　教授／吉原　修
●盛岡短期大学部　助手／松本　絵美
●盛岡短期大学部　助手／河野　紗代

■職員の部

【転出】平成18年3月31日付
岩手県立大学・盛岡短期大学部

●副学長兼事務局長　高橋　公輝［監査委員事務局／局長］
●副参事兼財務課長　古川　良隆［総務部　総務事務センター／主幹兼職員福利担当課長］
●総務課長　新屋　浩二［総務部　総務室／管理担当課長］
●学務課長　高橋　宏弥［久慈地方振興局　企画総務部／企画振興課長］
●主幹　小友　善衛［農林水産部　農林水産企画室／特命課長］
●主幹　小玉　裕司［総務部　総務室／副主幹兼主査］
●主幹　中田　周治［総務部　管財課／副主幹兼主査］
●主幹　照井　浩［監査委員事務局　監査管理課／副主幹兼主査］
●主査　斎藤　比呂彰［岩手県消防学校／主任消防教官］
●主査　高橋　市子［保健福祉部　児童家庭課／主査］
●主査　熊原　洋子［総合政策室　秘書担当／主任］
●主査　佐藤　結子［久慈地方振興局　保健福祉環境部／主査］
●主査　大内　玲子［教育委員会　教育企画室／主任］
●主査　小野寺　修［環境生活部　環境生活企画室／主査］
●主査　永山　光悦［商工労働観光部　観光経済交流課／主査］
●主査　有原　麗子［総務部　総務事務センター／主任］
●出納局　総務事務センター／主任　佐々木　哲［主査］
●保健福祉部　保健福祉企画室／主事　多田　容子［主事］
●千厩地方振興局　保健福祉環境部／社会福祉主事　倉野　貴子［主事］
●農林水産部　農業振興課／主査　吉田　耕［主査］
●遠野地方振興局　保健福祉環境部／主任　佐藤　裕行［主査］
●一関地方振興局　企画総務部／主事　正部家　忍［主事］
●一関地方振興局　土木部／主任　菊地　教文［主査］
●県土整備部　都市計画課／主事　佐藤　光勇［主査］
●二戸地方振興局　農政部／主任　福田　隆［主査］
●総合政策室　調査統計課／副主幹兼主査　小笠原　博［主幹］
●大船渡地方振興局　農林部／主事　泉山　道吾［主事］
●商工労働観光部　企業立地推進課／主任主査　坂本　誠一［主幹］

【転入】平成18年4月1日付　**宮古短期大学部**

●総合政策室　秘書担当／主任　田鎖　範夫［主幹］

【退職】平成18年3月31日付
岩手県立大学・盛岡短期大学部

●参事兼教育・学生支援室長／主幹　吉岡　朗子
●主幹／荒谷　勉

【転入】平成18年4月1日付

●主査　高橋　耕哉［医療局　管理課／主査］
●主査　福田　晃［総務部　税務課／主査］
●主事　佐藤　昌弘［宮古地方振興局　保健福祉環境部／主事］
●主事　村上　彰啓［県南広域振興局　花巻総合支局農林部農業技術センター／主事］
●主事　沖河　康弘［総務部　総務室／主事］
●主事　西澤　敬［久慈地方振興局　企画総務部／主事］

【転出】宮古短期大学部

●事務局次長　佐藤　文男［出納局　総務課／総括課長］
●主査　菅原　伸芳［県南広域振興局　総務部／主査］
●主事　長坂　聡美［保健福祉部　保健衛生課／主事］

【転入】平成18年4月1日付　**岩手県立大学・盛岡短期大学部**

●総務部　総務室／室長　古澤　眞作［副学長兼事務局長］
●北上地方振興局　企画総務部／管理主幹　小原　一信［教育・学生支援室長］
●総務部　人事課／主任主査　菊池　透［総務課長］
●田野畑村　助役　清水　一夫［学務課長］
●医療局　管理課／主査　鎌田　伸二［主査］
●環境生活部　環境保全課／主査　鈴木　厚子［主査］
●農林水産部　農林水産企画室／主事　曽部　文宏［主査］

思考と志向 Ⅲ

県立大よ、さらなる軌跡を

副学長
沼田　俊昭

開学以来、8年間にわたって勤務した、この大学を去ることとなり万感溢れるものがある。

とくに平成10年4月の第一回入学式の様子は、実に感慨深い思い出として蘇ってくる。

私は、学生部長予定者として入試業務の第一線に立った。平成9年の夏場から、しばしば来盛しては、その準備に当たっていた。

あらゆる角度から志願者数を算定し、上限を8000人として準備を重ねた。想定以上の志願者が来て、あらためて準備する混乱を避けるよう配慮したのである。かくして結果は7000人弱で落ち着き、混乱もなく対応できた。しかし新聞には「予想を下回る志願者」と報道され、説明不足を後悔する苦い経験が残された。

そもそも学生部長という職は、入試（入口）から教務、学生生活、そして就職（出口）に至るまで学生に関わる、あらゆる案件が守備範囲である（現在の教育・学生支援本部長に相当する）。良い知らせは、皆が喜んでから事後的に報告される。また悪い知らせは、八方手を尽くしても解決されない場合に限って回ってくる。創立時には、こうした役回りがずいぶんと多かった。

解決できて当たり前で、褒められもしない。できなければ責任上、記者会見の席に出なければならない。学生部長としての6年間、失敗も苦汁も味わったが、なんとか乗り切ることができた。

さまざまな局面に臨む際の判断基準は「本学の将来の為に何が最適か」という点である。学部長の皆さん、関係者も同じ思いであり、共通の志で結ばれてチームワークで解決を図ってきたという感が強い。あらためて皆様への感謝を申し上げたい。

学生部長を務めた後、平成16年4月に副学長を任ぜられた。守備範囲がさらに広くなり、学長代行として外に出る機会も多々あるが、おおむね縁の下での対応となり立場は同じである。

実に多くの貴重な経験をさせてもらった。人間とは、感情の動物であると思う場面もあった。しかし、大学は如何に在るべきか、と理性的に判断することを最優先してきたつもりである。

大学の使命は「知の伝承」「知の創造」であり、そして「知の活用」であると言われる。本学が擁する4学部は、これからの時代が必要とする人材育成への期待を担って誕生した。そして実学・実践を踏まえた教育研究が実施され、教養、高度な専門性を兼ね備えた人材を輩出している。卒業生の活躍ぶりを通し、大学それ自体の存在が、さまざまな形で社会貢献を重ねていると言えるだろう。

「優れた素質を持っているのにノンビリしている」。これは本学の学生を評する、一つの側面だ。そこで大きく可能性を広げてもらうために、私は提言したい。すなわち、三つの視点から自己確認の習慣を身につけてもらいたい。

第一は、真摯に努力して充実した一日であったか、と「虫の目」的に振り返ること。第二は、自己を「鳥瞰図」的に見る視野の広さを養うこと。そして第三は、時代の流れを読む「魚の目」的な感性とバランス感覚を高めること。第一、第三の方法に関しては、適切な書を読んで熟慮を重ねていく必要がある。無為に時を過ごして「井の中の蛙」とならないよう、自己を高める方法に邁進して欲しい。

最後に。本学は平成17年度から、公立大学法人として運営されるようになった。初代・西澤潤一学長から現在の谷口誠学長にリーダーシップが引き継がれ、さまざまな新しい施策が打ち出されている。変わり往く時代の中、しかるべき進路を定め、さらなる発展の軌跡を描いていくよう祈ってやまない。

サークルで元気者

手話サークル「ワノワ」

そうだ、気持ちも伝えよう

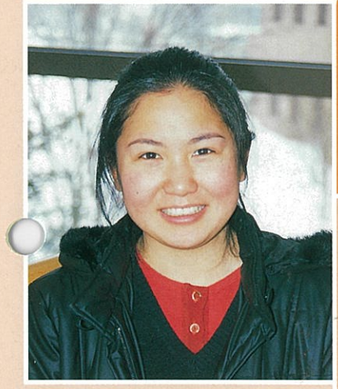
一人ずつ、指文字を作ってもらいました。出来上がったフレーズを左上から右下へ読むと「ヨ・ロ・シ・ク・ワ・ノ・ワ」。めいめい、とびっきりフレンドリーな気持ちを添えて「あなたも仲間に」と、メッセージを送っているのです。

まずは自己紹介から。そして日常会話、テキストにある例文などを表すのがイロハの段階。少しずつ上達していけば、文章や微妙なニュアンスの伝え方に取り組めます。

この春、2年生になる瀬川由衣さん（看護学部）が新部長で「アットホームな面々が優しく教えます」。火曜と金曜の夕方、社会福祉学部棟2階のプレイルームに集合です。

留学生サロン

社会福祉学研究科・研究生　**前田・ガブリエラ・直美**さん●アルゼンチン



国を超えた知見を求めて

タンゴで有名な大都会・ブエノスアイレスから来ました。父が大阪、母はブラジルの出身です。日系の病院で医師として働いている父の仕事に触発され、医療と福祉を結ぶ仕事に就きたいと考えるようになりました。

私は、介護福祉サービスの実践者を志望しています。老人学という観点から、高齢者福祉の方法論を学ぶのが来日した目的です。だから心理的な側面、社会環境とのつながりも注視しています。また、すこやかな暮らしを支えるためのケアと社会制度は、どうあるべきなのか。この点に関しても研究レベルの高い岩手県立大学で学び、勉強した成果を南米の地で活かそうと願っています。

実学に基づく 地域貢献の広がり。 その具体的な力タチに 期待を寄せて。

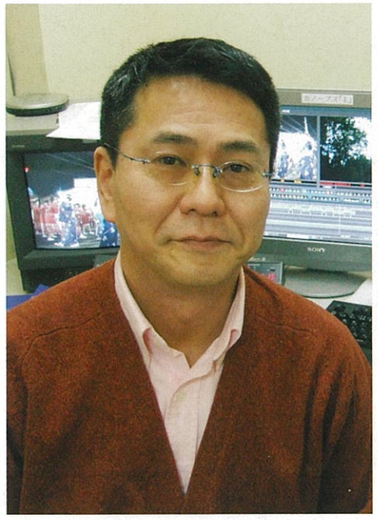
私は、遠野市のケーブルテレビ局で地域密着の番組やニュースを制作しています。いつも現場で頭を悩ませるのは「市民が欲しがっている情報って何だ!!」ということです。それらは変化する毎日の中で生まれてくるものなので、捕えどころがありません。

ある辞書に、こんなヒントが載っていました。「情報」とは「それを聞いた人の判断や行動が変わる知らせである――」と。

良い情報は、受け取る人に何らかの「変化」をもたらします。そうした特徴を読み取れないもの、あるいは意味を持たない羅列は「データ」と呼ばれます。さまざまな情報もしくはデータの中から、役に立つ情報(意味ならびに内容)を選別して発信するのが私の仕事です。

テレビニュースでは、お年寄りや子どもにも分かりやすくポイントを整理し、かみ砕いて表現することを心がけています。耳で聞いて判別するために単語の配列も考えます。また専門用語は必ず、ふだん使っている表現に言い換えます。そして当たり前ですが、そ[illegible]象徴する形で、編集された映像が付きます。いわば情報を加工して、誰もが意味と内容を汲み取れるように気を配っているのです。

ニュースや番組の制作指導を務めていて感じることがあります。初心者は、言葉や文章だけで表現しようと陥りがちです。そもそも人間は、絵(イメージ)と音(言葉)で物事を考えます。そして考えたことを他人に伝える時、絵と音は一緒のほうが良く伝わります。それが、そのままテレビ番組やニュースの構成要素となります。



(株)遠野テレビ　制作課長

平野　誠

昭和32年、遠野市生まれ。遠野高校～日本大学芸術学部映画学科卒。ディレクターとしてテレビ番組の制作などに携わった後、平成3年、岩手めんこいテレビに入社。宮古支局長、県政記者クラブ担当、制作部副部長などを経て遠野市役所情報化推進室へ。平成12年8月より現職。

これまでの学校教育は、言葉による表現が主流で、映像文法(イメージの構成)は脇に追いやられてきました。しかし、人間がテレビから受け取るインパクトの7～8割は映像によるもの、と言われます。そして私達は、知らず知らずのうちに大きな影響を受けています。テレビ情報が氾濫する一方で、一般の人がテレビを使いこなそうとする時、言葉や文章だけで考えるとイメージを忘れ、伝わりにくい情報になってしまうケースが起こりがちです。

ニュース記者に成りたての頃。ある大学が地域振興を目的とするシンクタンクを設立したというので、記者会見を開きました。説明には、地域振興、という言葉が頻繁に出てきます。ところが何をするのか、よく分かりません。

そこで私はズバリと切り込んで「地域振興という言葉を使わずにイメージを表現していただきたい」と質問してしまいました。地域振興とは、便利な言葉の表現です。しかし「その音」は伝わっても地域や現場が、どう変わるのか「イメージ」は伝わってきませんでした。

岩手県立大学では、地域貢献が重要視されているとのこと。これは言葉の上だけの抽象論ではありません。開学の時に「近所のパン屋さんの役に立てるようなソフトを作る」と、実学重視の精神が示されていました。これによって具体的なイメージが伝わってきたのです。

今では一人ひとりの学生や教授陣の活動の数だけ、イメージも広がりを見せていると思います。その場合、「あなた」にとっての地域貢献とは何でしょうか。どの地域で、どんな貢献を果たそうと指向しているのですか。

たとえば、遠野市で県立大が◎◎をした…。これだけでケーブルテレビのニュースとしては成立します。その時点で、地域貢献がめざす内容の何パーセントかは達成だと言えます。あとは、どうやって中身を充実させるか、という次元でエネルギーが注がれたり語られたりすべきです。

期待を込めて私は問います。県立大には、ケーブルテレビで放送したくなるニュースや話題が無尽蔵にあるのではないでしょうか。

どこで、
どんな花を咲かせますか。

古今の童話や小説をアレンジするラジオドラマ、ディスクジョッキーによるトーク番組、さらにゲストを迎えて旬の話題を紹介…。さまざまなコンテンツづくりで放送部の面々が活躍します。

風を起こせ ③

共創メディア研究プロジェクト

地域に根ざす「マイ・ラジオ」

IPUFM(仮称)の誕生へ。

小規模エリアを対象に、さまざまな活用法が広がっていくコミュニティFM局。地域活性化という観点から、その可能性が学際的に探られています。本学を特徴づける知的資源、放送部を主体とする学生パワー。さらに、番組制作や運営に参加するボランティアスタッフがオンエアへの推進力です。身近なメディアによるコンテンツ配信に向け、自治体との多面的な協働も図られようとしています。

「環境、ひと、情報に関わる全学プロジェクトの一つとして、コミュニティFM局の設置が具体化しつつあります。多様化する情報通信技術の活用、放送とインターネットの融合、さらにコミュニケーション・エリア・ネットワーク(CAN)の構築。こうした方向性を掲げて地域密着型メディアを立ち上げ、その有効利用を図るのが目的です。

共創メディア研究プロジェクト。このネーミングには「いろいろな人が、それぞれの関わり方を通して一緒に創り上げる」という意味を込めました。技術的な対応、あるいは放送内容の充実に向けて教員の多彩な人材力を活かします。具体的なコンテンツ制作は、放送部の協力を得て進めます。また、さまざまな形で運営に携わるボランティアを募って住民パワーも注入する予定です。

来年度のオンエア開始へ向けて

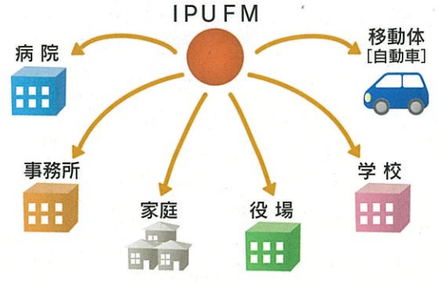
「この春、地域連携研究センターに共創メディア研究所を立ち上げます。試験放送、そして正式な開局に向け、いよいよ準備が本格化する段階です。機材を揃えてスタジオを設けるほか、プランを練ったりミーティングしたりする拠点として活用しながら気運を盛り上げます」(プロジェクトを統括する伊藤憲三教授=ソフトウェア情報学部)

それぞれの専門の立場から、各学部の教員が学際的な研究に携わっています。放送用の素材(アーカイブ)をデータベース化、ホスピタルラジオの運営、防災・災害支援や社会福祉への活用、自動番組創出システムの構築、雑音のない安定した音質の確保、さらにインターネットとの融合と配信など、役割分担は多岐に渡ります。

コミュニティFMと位置づけられるIPUFM(仮称)。想定される配信エリアは、本学を中心とする半径20㎞圏内です。ここから発せられる電波に乗せ、さまざまな情報を届けられるメディア特性に地元・滝沢村の行政関係者も期待を寄せています。さらに、緊急時や災害時の情報伝達手段として。あるいは児童・高齢者・長期療養者などへ憩いと話題を提供する際も。住民にとって身近なメディアは、より地域に密着した広がりのある番組編成を通して価値を高めていくのです。

IPUFMによる情報配信イメージ

- 滝沢村を中心とするエリアに向けて
- 村政・緊急・災害・教育・福祉・交流などに関する事柄



実学おもしろ主義

ムズカシイ。けど楽しい。

「郵政民営化を巡る考察」

村上　拓［宮古短期大学部　経営情報学科／2年］

この国の行方を左右する大切なことは、いろいろ挙げられる。それら一つ一つに目を凝らすと、社会の変容ぶりが浮き彫りになる。

学生として。あるいは地方に暮らす生活者として。微妙に交じり合う二つの視点が、今と未来を捉える問題意識を育んできた。

「日本経済の仕組みが、どのように変わっていくのか。これが僕にとって最大の関心事です。政策判断によって生じるであろう諸々の功罪を含め、その影響は大なり小なり、宮古のような地域社会にも波及するはずだから」

と、取り組みへの動機を話す村上さん。卒業論文の素材に郵政民営化問題を取り上げた。

「金融とか財政とかの改革と言われると、どこか遠い次元の難しい話として受け止めがちですが、決してそうではないと痛感しました。自分の暮らしに深く関わる政策案件だし、また別の意味では、歴史的な転換期を象徴する極めてタイムリーな事例だと思います」

ふだんから抱く素朴な心情、生活観にも裏打ちされてテーマの立て方、着眼点、研究の進め方に主体性と具体性が備わった。

情報源を、うまく使おう

いわゆる受け売りの知識や考察に陥ることなく、自分のアタマと言葉で論を進めようと努めた村上さん。マクロ的かつ基礎的な理解を深めるために、さまざまな金融・財政系の文献と向き合った。こうした一方で、論議の焦点や情勢を大局的に把握したり、関係当局が打ち出す見解や指針をフォローしたりするためにメディアの活用を図ってみた。

新聞にテレビにインターネットと、情報源には事欠かない。町や村というフィールドに出て郵便局の現状を探れば、まさしく生きた情報を入手できる。しかしデータを集めるのは、あくまでも手段であり、やみくもに行うのは非生産的である。そこで欲しい情報へのアクセス方法を工夫するとともに、さまざまな情報の整理と分析作業にエネルギーを注いだ。

いったん方向性さえ固まれば、あとはコツコツ進めるだけだった。所属ゼミの教員として宮沢俊郎・助教授（日本経済論／金融論）が指導を受け持ったが「先生の手を煩わせた記憶は、ありません」。村上さんは笑顔で、こう言い切った。何かアドバイスが欲しい時、分からない点に直面した時、必読文献を借りたい時など、自主的に研究室を訪ねて知識や考え方の充実、更新を図るのだった。

生活者の目線で捉える

郵政民営化に反対、という論調で村上さんは卒業論文を仕上げた。その理由は明快だ。

たとえば採算性と効率性を追求する一つの形として、それぞれの地域に根ざす特定郵便局が廃止されると仮定する。そうなれば郵便・保険・金融のサービスを、これまでのようには受けられない人たちが出てくるかもしれない。一般的な傾向として農村部や山間地帯では、郵便局の存在が生活を営む上で不可欠と言える。したがって、それが無くなってしまうデメリットは直接的に現れる。

お年寄りが、年金の受け取り口座の開設で不便な思いをさせられる…という困った状況さえ容易に推察されるのだ。利用者の立場から郵政民営化を捉えると、地域ごとのサービス格差を解消するために、もしくは縮めるためにセーフティーネットが不可欠である、という結論を村上さんは導き出した。

「やがて新しい枠組みがスタートする時、国民レベルに及ぶ影響へと考察を広げました。全国どこでも誰にでも、というサービスの均質性。そして利用者の利便性を高める方法。この2点に十分な配慮が行き届くなら、ある程度は肯定的な見方ができるのですが…」

社会へ出るための足場固め

それにしても2年間は短かった、と村上さんは駆け足の日々を振り返りながら感慨深げだ。勉強の面白さ、奥深さにふれた意義は大きく、かけがえのない財産を残せた。

宮沢助教授が講じる「現代日本経済論」「中小企業論」「金融論」は、タイムリーな内容を系統立てて展開していくので興味津々、分かりやすかった。ひと言で表すなら「ムズカシイけど面白い授業」と、満足度は高い。

コミュニケーション重視の教授法が効果てきめん。英会話への苦手意識を払拭できた。また、パソコンの入門編はクリアできたので、これも短大で学んだ成果として挙げられる。

愛着が湧いてきた宮古を離れるのは名残惜しいが、この4月、村上さんは警察官としての第一歩を記す。就職先は宮城県警。「小学生の頃、お巡りさんの仕事ぶりが凛々しく思えて、ずっと憧れの存在でした。志を貫き、念願を叶えられるのが嬉しいです」

高い倫理観に裏打ちされ、さまざまな場面で市民の役に立てるように。そんな職業像を描き、村上さんは希望の春を迎えている。

結びのQ&A

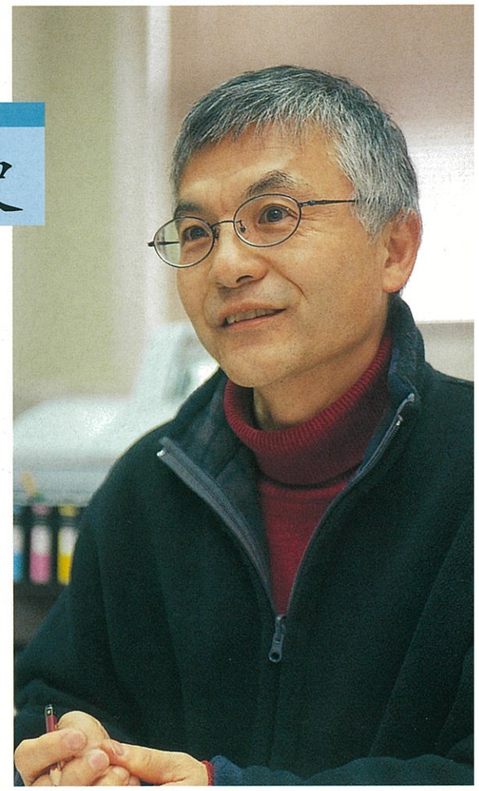
- 得意なこと
  …「それは剣道。二段です。小学校から続けています」
- 自分の存在
  …「ここぞ、という時の盛り上げ役」
- 学生生活の証
  …「自炊で使い込んだフライパン」
- 宝物
  …「友達、家族」
- 今の社会に思うこと
  …「子どもたちが被害者になる犯罪に心が痛みます」
- 職業観
  …「公のために。襟を正して」

教える私・究める私

パイオニア精神の意味と行動。

看護学部 教授

山内　一史



情報科学、そしてコンピュータサイエンスとの融合が「看護情報学（Nursing Informatics）」の誕生と進化を促してきました。IT化が図られる医療現場との結びつきを深めながら、新たな専門分野の担い手である山内先生はパイオニア精神を燃やしています。

意欲的に著書や論文を手がける一方、看護教育の場面では、情報リテラシーを指導するキーパーソンとして大きな存在です。「そもそも情報とは何だろう。患者様のために、どう活用すれば良いのでしょうか」。このような問題提起に始まり、機器やシステムやデータの活用法、さらに基本姿勢としての情報倫理などを実践に即して伝えていきます。

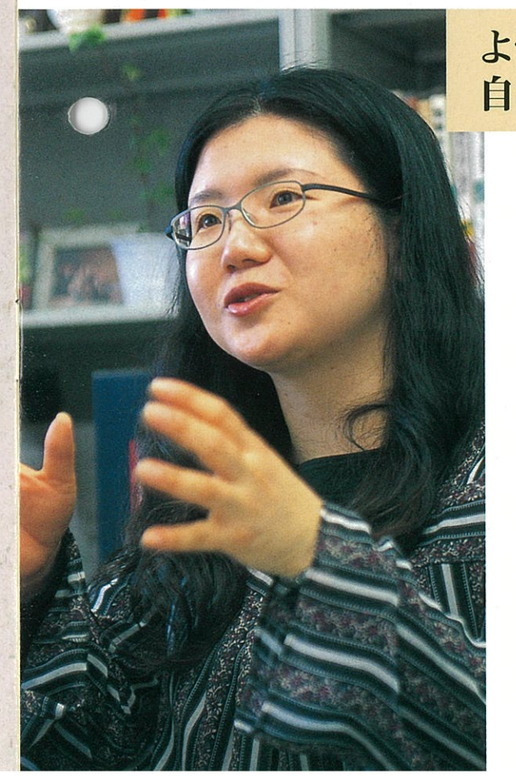
「いろいろな方法を探る目的意識を共有したいと思います。オリジナルな考え方と主張を重視するので、絶対的な正答は求めません。もちろん試行錯誤も、失敗を通して学ぶプロセスも重視します。固定観念に囚われなければ、より有効な理論や方法に近づけます」

学生と一緒に、知見を重ねていく山内先生。教え子の研究が学会発表で脚光を浴びるケースも多く、確かな手応えを感じています。

［やまのうち　かずし］
筑波大学生物科学研究科（博士課程）生物物理化学専攻を修了。理学修士。千葉大学、宮城大学の看護学部を経て2001年より現職。看護情報学の観点に立ち教育プログラム開発、情報倫理の構築、患者情報の共有のあり方などを研究する。学部での担当科目は看護情報学、看護情報管理論。共著に「看護情報学における情報倫理」（太陽出版）ほか。

社会福祉学部 福祉経営学科 助教授

ようこそ、自由なる学問の場へ。小野澤　章子



とても良い意味で型破り。それが小野澤ゼミのテーゼであり、気風です。ちょっと視点を変えて社会福祉を捉えたい、福祉観を広げたい。そんな問題意識を持つ学生が、自由なる学問の場へ惹かれるように集います。

そこで、熱っぽく言葉を繰り出す小野澤先生。方向づけや発想の広げ方をアドバイスしたり、さまざまな疑問や論点を提示して議論を勧めたり。テーマの醸成能力を持つ学生を、学びの高みへと、いざない続けます。

「社会学の知見を活かしながら福祉に関する多様な視座を育てていこう、と呼び掛けています。人々の暮らしを支える福祉という領域を実証的に解き明かす過程では、社会構造や多様な地域課題にも目を配らなければなりません。いうならば社会学に立脚して、社会福祉学との接点をみながら人間や社会を追究するのが、私の学問的なスタイルです」

いくつも対象が見つかり、手法も固定化していない社会学。「仏事や教育、カウンセリングなど、お寺が地域で果たす福祉的な役割を研究したい」と学生が切り出すと、小野澤先生は言いました。「それ、オモシロイ！」

［おのざわ　あきこ］
明治学院大学大学院社会学研究科・博士後期課程で学ぶ。修士（社会学）。1996年10月、岩手県立盛岡短期大学保育学科助手。社会福祉学部講師を経て2005年4月より現職。専門分野は地域社会学、社会調査論。フィールド調査に基づいて農山漁村・都市の地域社会研究などに取り組む。主な担当科目は社会学・調査技法・福祉調査実習。

自分史を創る人

メーカーで、適性は開花する。

佐々木　聖実さん
［盛岡短期大学部 生活科学科 生活科学専攻／平成17年3月卒］
サンポット（株）　研究開発課

●就職先は、住生活の関連分野

卒業研究の素材として、木質バイオマス燃料を取り上げました。それと関連する環境がらみの業界を志望し、しかも地元に就職、という希望が叶って暖房機器メーカーに勤めています。住生活は、どう在るべきか考えたこと。さらに断熱構造、エネルギー循環など住居に関する科学の勉強が志望動機の醸成に役立ちました。

●CADの基礎も役立っている

私は、設計や実験で忙しいエンジニアの仕事を事務職としてサポートする立場です。伝票整理に予算管理、電話の応対などをテキパキ進めねばなりません。在学中に習ったCADの基礎は図面整理で役立っています。パソコンのスキルも、社会に出てすぐに使えました。2年目からは余裕が生まれ、仕事の幅が広がるでしょう。

●プロ意識が高まっていく

メーカーに就職すると、今どきの技術や商品が分かるので時代感覚を磨けます。モノづくりの分野ほか、短大生が選択肢を増やして進路が多様化するのは望ましい傾向だと思います。総務・物流・購買・業務推進など他部門の業務にもスムーズに適応できるようプロ意識を高め、あわせて商品知識を増やすのが2年目の目標です。

学んで創ったキャリアプラン。

及川　希さん
［宮古短期大学部 経営情報学科／平成17年3月卒］
（株）ワイズマン　医療システム1課

●意志を持つことの大切さ

どうすれば情報システムの仕事に就けるのか、という意識を育てながら学生時代を過ごしました。勉強と並行しながらキャリアプランを描く…。そんな感じだったでしょうか。情報科学系の科目で深めた専門性を活かそうと、進路選びにも前向きでした。宮古での2年間を良い形で終えよう、と意志を固めて就職活動を乗り切ったのです。

●先進システムが生まれる現場で

開発部門で、病院向け電子カルテなど医療システムに携わっています。チームでの私の役割はプログラムの動作チェック、調整作業など。新発売、あるいはバージョンアップに向けて工程が進むほど緊張感は高まります。営業活動を含む全社的な流れの中で「何を成すべきか」と、業務のツボを把握できるようになりました。

●技術の粋を、世に問う仕事

入社1年目。当社がリリースしている多様なソフトウェア、システムへの理解が深まったと思います。全国に、たくさんのユーザーがいることも知りました。キャリアステップとして考えられるのは、プログラミングに精通した上でSE（システムエンジニア）として能力を伸ばすこと。開発者への仲間入りが、今から楽しみです。